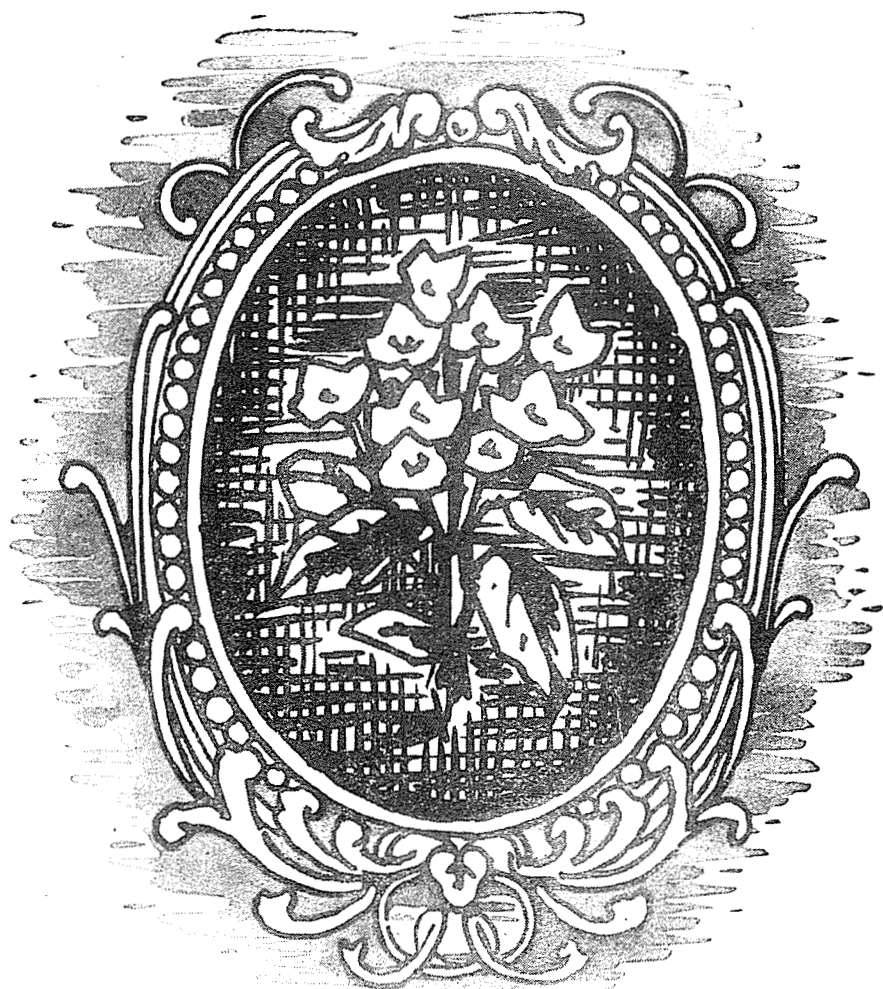


報學學大西哥

號九十七百第

月五年五十和昭



行發局報學學大西關

大阪商科大学 教授 陶山誠太郎 著

新刊

軍需品工場の原價計算

菊 判 上 製
三 百 十 八 十 錢
定價 二 圓 四 十 錢
送料 十 圓 四 十 錢
圖書 十 種
解式 十 種

經濟統制と計算的秩序とが不可分の關係にあることは議論の餘地がない程である。来る七月一日より陸軍軍需品工場に對し、陸軍省令に依る原價計算要綱を強行して、適正なる調辨價格を求めんとする。著者は斯界の一權威者なり。茲に軍需工場の爲に要綱を中心として独自の解説を試む請ふ閣讀あらんことを。

＝ 容 内 書 本 ＝

はしがき 第一、原價計算を行はざる工業會社の會計は信頼し得るや A、商業會計と工業會計との相異 B、工業會計に於て損益計算を行はんとせば製品、仕掛品の原價計算は絶対に必要なり
 第二、統一原價計算制度 A、業種別統一原價計算制度 B、陸軍々需品工場事業場原價計算要綱は統一原價計算制度ではない、附「要綱」の補昭權認容條項に付いて C、個別軍需工場の原價計算準則又は原價計算便覽
 第三、原價計算の二方法 A、原價計算とは何ぞや B、個別原價計算方法、附勘定組織 C、綜合原價計算方法、附勘定組織
 第四、原價の構成要素 A、原價種類 B、製造原價要素 C、一般管理及販賣要素 D、非原價項目
 第五、記帳手續 A、材料仕入記帳手續 B、材料の消費計算記帳手續 C、賃金計算記帳手續 D、經費計算記帳手續 E、原價計算記帳手續 F、一般管理費及販賣費計算記帳手續
 第六、諸帳簿書類及様式 附録 一、米國工具製造組合の統一原價計算便覽に於ける諸表、二、陸軍々需品工場事業場原價計算要綱 三、海軍々需品工場事業場原價計算準則案

陶山教授著

會 計 學	會 計 學	會 計 學	會 計 學
監 査 總 論	監 査 總 論	監 査 總 論	監 査 總 論
企業豫算統制と標準原價計算	企業豫算統制と標準原價計算	企業豫算統制と標準原價計算	企業豫算統制と標準原價計算
經營の分析と合併に於ける諸計算	經營の分析と合併に於ける諸計算	經營の分析と合併に於ける諸計算	經營の分析と合併に於ける諸計算
送料價 二圓二十錢	送料價 二圓二十錢	送料價 二圓二十錢	送料價 二圓二十錢
送料價 一圓二十錢	送料價 一圓二十錢	送料價 一圓二十錢	送料價 一圓二十錢
送料價 一圓五十錢	送料價 一圓五十錢	送料價 一圓五十錢	送料價 一圓五十錢
送料價 十一圓五十錢	送料價 十一圓五十錢	送料價 十一圓五十錢	送料價 十一圓五十錢

大 阪 電 話 替 北 區 梅 田 新 道
 番 番 番 番 番 番
 八 三 二 一 八 京 東 替 振
 番 八 二 二 二 田 神 話 電

大 同 書 院

前學大央中臺河駿京東
 番 八 三 二 一 八 京 東 替 振
 番 八 二 二 二 田 神 話 電

目次

默禱の一分間……………正井敬次(一)

なかしなの旅……………川上敬逸(三)

新刊書架に拾ふ……………來島志朗(六)

學内報……………(七)

晴國神社臨時大祭—人事異動—武田宣英博士大學總充資金寄附—漢部逸太郎氏獎學資金寄附

校友……………(八)

朝鮮支部—福岡支部—大連支部—斯文會—會員消息

本學年度學科目擔任表……………(三)

學生彙報……………(七)

學術研究會聯盟—經友會—語業研究會—東亞研究會—國語漢文學會—漢論部—航空部—陸上競技部—庭球部



默禱の一分間

專門部長
經濟學博士

正井敬次

事變以來、わが國民は國家的の式典其他の機會に就て、護國の英靈に向つて一分間の默禱を捧げることになつてをる。殊に靖國神社大祭に際しては、我等は靖國の神靈を遙拜し且つ默禱を行ふことによつて、我等の國民的感激と感謝の意を盡すことになつてをる。默禱は英靈に對する感謝の默禱と云はれてをるのであるが、それには單に感謝と云ふのみにては竭せぬ所の重要な意義があると思ふ。即ち一分間の默禱には一時間を以てしても説くことを得ず語るを得ない所の聖き意義があるのである。

默禱の一分間に於て、我等は日本の國體と歴史を想ひ、事變に於ける勇士と勇士の英靈に感謝の意を致し、而して國體と歴史と英靈との關係に於ける我等自身を思念することが出来る。併し事實上默禱に於て我等は以上のことを意識的に思念することはせないのであり、且つまた默禱時に於ける統一的の精神はそれをなすことを許さないのである。然らば默禱に於ける我等の心的境界は如何と云ふに、我等はその際に、國體と歴史と英靈と我等自身との關係の想念を、統一せる一箇の意識に集中し、自我を離れてこの抽象的客觀的の意識に没入せる、一の聖なる客觀的の心境を用意するのである。默禱時に多くを思念するのではなくして、潜在的なる多くの理念の上に統一せる客觀的の心靈を置くのである、或はまた潜在せる多くの想念を一の心靈にまで統合するのである。

然らば默禱時の統一的客觀的の精神は何を念ずるかと云ふに、是は一途にたゞ護國の英靈への融合である。護國の又は靖國の英靈は即ちこれ神である。かくして默禱に於て我等の心靈はたゞ神への融合を祈るのである。我等に於ける我等の自我を離れたる如上の心靈は、それ自體に於て一の神であると云つてよい。是に於てか、まづ神靈を箇身に迎へ、この靈の、より大きな神靈への融合を禱ること、それが默禱の一分間である。



なかしなの旅

教授 川上 敬 逸

慶祝の日の 南京のプロフィール

春雨

中山陵の

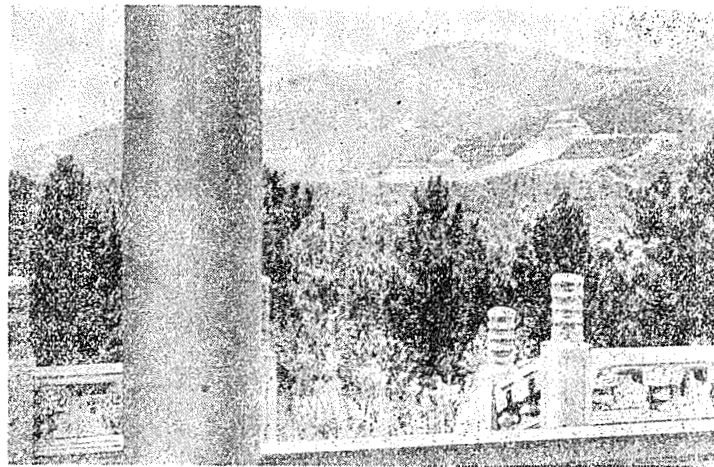
花の色

絹絲のやうな春雨が、降つたり止んだりしてゐた。煙管を口に、蓑笠を着けた一人の農夫が、水牛の脊にまたがつて、中山門を出た城壁のそばで、青草を喰はせてゐた。

いよいよ明日は「國民政府遷る」の日である。細く長く垂れた柳の緑にも、春はもう晚れ近い。ものいはぬ花ばかりが、中山陵の麓で、雨にぬれて咲いてゐた。めぐる春ごとに、或る禪僧がよく手紙の冒頭に書いて寄越した「柳緑花紅」の四字がサツト私の頭をかすめた。この僧の下訪を受けて、その見ごとな禿頭ごしに床の間の南嚮をながめたが、彼と對談してゐる或る日の思出と、ともに。
(私の旅日記―三月二十九日から)

晴れず降らずの春雨にむせぶやうな月であつた。

こゝ首都南京は「慶祝國民政府改組遷都」の新生の息吹に包まれてゐた。濟民救國の望みを託されたやうに砲煙幾そたび、燒かれては家を喪ひ、夫に死なれ、



中山陵(孫文の墓)を望む―南京

父に別れた無辜の女、子供のプロフィールまでが、今日は素直に明るい。長い布で作られた草色模様の褌や、

汪先生の似顔などに凝らした賑かな行列に練り歩く市民の歡喜の姿には、思はず、目頭を熱くさせられた。またしても、またしても練り返へされた興亡の苦艱に堪へてきた中國の民ならではの、感に打たれずにはゐられない。

(私の旅日記―三月三十日から)

「上海へ南京」八時間

クリークの

帆かげに暮れる

麥の里

廣茫萬里。はじめて中國に旅して、なほ「みじみと考へさせられることは、大地に生れて大地に生を託する中國農民の中から、たえず都市の難民窟に押し流されたり、共匪にそゝのかされて行くもの、救の、可成りに多い事實である。

み渡せど、み渡せど、渾しない春の中支那は、髮條とも知れぬ白いクリークの絲にぬはれた青い毛氈のやうに、うちつゞく一面の麥野原である。

「上海―南京」八時間の間、車窓の眼に展ずるものとしては、白壁の民家と、髪を洗ふ乙女のやうにクリークに垂れた楊柳のほか、たゞ夜々として働く淺黄服の

農夫の姿があるのみである。柴を刈れそうな山や丘さへない。何を焚いて百姓は冬を越すのであらう！

心なしばかりではない。通りすぎの旅の目でみれば、心なしくるやうな、のどかな眺めであるが、よくみれば、その麦の色は、まだ短いのに、野らに働く支那の百姓の服のやうに、淺黄色に染せてあるではないか

幼い頃、ブーンと麥の香のせまる五月の末、河内野の畑の中で、友だちと、足音をしのばせて雲雀の巢を探し歩いたり、「くろんぼ」と呼ばれる墨の粉で粘り固められたやうな病害の麥穂を抜いては、口籠をかいたり顔にぬすりあつたりした昔が、思ひ出されるのであつた。大地に、麥の穂の出そるふ頃ともなれば、稔りなきくろんぼが、どんなにか多いことであらう。

さらでだに、乏しい彼等の收穫は、いつたい、どんな手からどんな手を経て賣り捌かれて行くのであらう？ 農家に生れて農村に育まれ、そして今また農村に住み馴れてある私の心を痛めぬものは、どれ一つもない。「地主—官僚—高利貸」の三位一體は、害虫に蝕ばまれたくろんぼ以上に、中商農村の癌であると聞かされる。種苗の消毒、土壤の轉換もさることながら、鼻をつくやうな、この農村搾取機構の根絶こそが、その成立早々から課せられた新政府の課題ではあるまいか

(私の旅日記—三月二十八日から)
南京から、再び上海への歸るさであつた。蘇州見物のために、早朝に南京をたつたO教授やM教授らの四人が、T教授と私の乗つてゐる列車に乗り込んできたときは、夕まぐれのことであつた。クリークの泥をすくひ上げては土肥を蓋へてゐる農夫は、まだ歸らうとしてゐない。クリークの兩岸から、長い網で江へる

やうに引かれて歸る帆かけ舟が、大地に没するオーロラのやうな夕陽を一つばいに受けて、夕暗せまる村里に消えてゆくのが、何となく私には、印象的でない。これも、また幼い頃。鎌を肩に家路を急ぐ農夫の姿もうす暗い晩春のある夕まぐれ、絶えまなくジイーと鳴きつゞける靜かな虫の音を「おとうさん、あれ何の虫？あの虫の聲なぜ淋しいの？」と幼な心にも、あはれをたづねたら「あれは、みづの泣く聲よ」と答へてくれた亡父の面影が、私の目頭を熱くする。

晩れ近い春の中支那の夕まぐれ、暗の中に吸はれゆく車窓の旅にも、ものあはれはこよなく深い。

名を求めざる民の心

——上野先生のことども——

上海の自然科学研究所といへば、知らぬ人はないが中國新文化の母、上野太忠先生の存在を知る日本人は餘りにも少いやうである。

政變また政變、さらでだに窮乏の中國民衆の生活を思ふとき、心あるもの、誰かしづかに中國文化千年のいとなみに、落ちついて生涯を託することができやうか。文化運動よりも政治運動へ！それが、宿命の農村をめぐる中國インテリのプロフィールである。さほれ文化なき新秩序は、教へなき伽藍である。「建設新秩序」が、同時にまた「建設新文化」でなければならぬ所以のもの、實にこゝに出づるのみ。

上海に和平運動の起つたのは、一昨年春のことかと思はれる。傅式説と梅思平の兩氏がその中心のやう

であつた。極秘裡に行はれてゐたこの運動が、一昨年秋頃になつて漸く表面化し、具體化し、やがて、それが今日の新政府の實を結ぶに至るまで、そこには、どんなに荆棘の途があつたことであらう。

上海の新聞や雑誌にも、抗日派のものや共産派のものが多かつたが、昨年の夏から秋にかけて、和平派と抗戰派とが激しい闘ひを演じ、互にテロ團を使つて鎗を削つた結果、やうやく軌道に乗るやうになつたのがこの和平運動である。そして、上海におけるこの運動の淵藪の一として是非擧げられねばならないものに、文藝科學社の運動がある。それは、傅式説氏(新政府の鐵道部々長)や、李聖五氏(司法部々長)らを指導者とする二百人はかりの文化人からなる團體で、「抗議」は、そこから出された和平派の最初の雑誌である

この雑誌は、蘇州河を渡つて日本の警備区域内に持つてきて印刷された位で、萬一見つかりでもすれば、抗日テロ團に印刷工場は襲はれるし、和平派の文化人は襲撃せられるといふので、一方ならぬ苦心のあつたものだと言はれた。もちろん、當時は街頭で、新聞でも雑誌でも、和平派のものを賣るといふこと自體が、既に命がけの仕事であつた。

あの「抗議」といふ雑誌が「平議」と改められ、今日の「更生」といふ名に變るまでに進んだ経路を偲ぶだけでも、新生中國政府の多難な歩みを思はせるに充分である。なほ、こゝ(文藝科學社)から出される雑誌には、私どもの記憶してゐるものだけでも、右のほか新科學、國風、教育月刊、小主人、世界文粹などを數へねばならない。

そればかりではない。このたび新政府の成るや、文

藝科學社の中心人物は、ほとんどその要人として迎へられて、行つてしまつたのである。

身邊の危難を敢てして、しかも名を求めず、一意中國文化運動の健全な發展を祈つて、或は影となり日向となつて、文藝科學社の同人を庇護し、激勵しつゞけて來られたわが上野太忠氏の悦びはこれを思はぬではないが、その文化再建の多難なる前途に頭を悩まされ心を碎かるゝ上野先生の姿は、一層偲ぶに堪へぬ思をさせられたのである。「認められることを念とせず、内に蓄へること」のいかに重要であるかは、文化よりも政治に、政治よりも戦争に、より多くの人材を吸はれ易い中國であるだけに、一層切實なるものを感じしめられるではないか。

それにつけても、事變來わが上野先生は、在支二十數年の辛酸を身にしめて、どんなにか心を碎かれたことであらう。名を來むる民は多かれど、身を挺して、なほ名を求めざるところに「名も無き民の心」を心とせられるわが上野先生の輝しい存在があるのである。

文藝科學社の人々と語る

大陸第二日目の夕方であつた。私どもは、上野先生から廻はされた好意の自動車で、共同租界なる上海自然科學研究所へ赴いた。

日華國民新文化の母上野先生の御心づかひとあつて式典近いこの夜にもかゝはらず、集る中國要人、インテリの眞摯なる、まづ頭が下つた。

「みなさんは、一番悪い折を選んでこられたのですか、皆南京へ行つて了つて、この上海は空らつぽです

よ」と、春休を當て込んでやつて來た私ども先生連を冷かした軽い氣易い穿隙風の中で、杯を交はし、意見を述べた。



明考陵の道石の一人——北京

もちろん、まづ最初に、東亞聯盟論が東亞共同體論との比較に於て粗上に上つた。彼らは、ソックリドイツのゲマインシャフト張りの共同體論が東亞新秩序の

輝しい指導者たる日本の學者や政治家の口を割つて出ることの不思議から話した。そこで、時をすかさず、私ども東亞聯盟論を一席辯じ立てた。私どもの主張については、曩に東亞聯盟協會から使はされたA氏が、可成り話しておかれたために、その理解には相當に深いものがあつた。しかし、それだけ私どもに向つて話された彼らの要求には、一層切實なものがあつた彼らはいふ。「あなたの方の御説は至極結構と思ひますが、それだけに、またそれは餘ほど強い話であるやうに思はれます。現下の中國は、和平運動そのことだけ、私どもは命がけなのですから。實際、今日でもなほ、私ども同志の宅には、ピストルの彈丸の小包が時々鄭重に送られて來るのですからね。われわれもまた、東亞聯盟にも共鳴しますが、しかし、皆さんもまた、現下の中國がお國の政府に、またお國の國民に何を求めてゐるかといふことをハッキリお汲み取り下さつて充分御盡力を願ひたいんですがね。私どもは、お國にとつて、どんな意味でこの中國がどれほど必要であるかといふこと位は、既に承知しておりますから云々」と。

しかし、彼らはいつた。「私どもは、お國の國民の心を心として、下から湧き出てくる國民運動の先驅として、はるばる訪ねて來て下さつたことを心から多としたいし、また今後とも、そうした心あるお國の人々が一人でもより多く、私どもと胸襟を開いて語るべく大陸に來て下さるやうに、特にお骨折を願ひます」と。たまたま、談が「重慶」に及んだとき、蔣介石を偉人とみるか否かについて、張寶平氏とR氏との間に卓を叩いて激論が交へられた。因に張氏は、多角戀愛論

の鼻祖としても名のある人であるが、ある事情で新政府には入らなかつたが、別に建國運動を起して和平東亞のために粉骨の誠を捧げられてゐる。ことに、傳式説氏は、私どもの一行の「教授」と既に深い面識があつただけに、私どもに随分鋭く質問を投げかけては、痛いところをチョッピリチョッピリついた。しかし、私どもは討論會に出るために支那へ遣はされたものでは勿論ない。互に相敬ひ、相信じて語るどころ、それが真理であるならば、我たると相手たるとを問はず、その前に頭を垂れるだけの概は、せめて命をかけて國事を語る中國の人々と意見を交はさうとするほどの日本人ならば、是非とも持ち合せてもらはねばならぬものと、つくづく考へさせられたことであつた。それにつけても、民間團體から派遣され、名譽にも金にも縁なき私どもの氣易さを信じて、可成り思ひ切つたことまで腹を割つて話してくれた彼らの真剣さを、この有意義な機會を作つて下さつた上野先生の至情とともに、私は永く忘れることができぬ。

經濟の倫理と經濟の論理

上海租界の印象

蘇州河 論理と倫理のにらみつき

誰であつたか、あるところにこんなことを書いてゐた。それは、たしか「經濟の論理と經濟の倫理」といふことばであつたやうに思ふ。

恥しい次第ではあるが、素直にいふと、私は國際法を専攻してゐながら、今まで租界の問題が何ぜそれ程「建設東亞新秩序」の痛であらねばならぬかといふこ

とを心から諒解することができなかつた。

共同租界で日英兩國の警備區域が限られてゐるあの蘇州河を一つ隔て、經濟の倫理と經濟の論理とが、互ににらみつきをしてゐるのが、この租界問題の縮圖であると思へば、大體誤ない。それは、この度の視察のおかげである。考へることも必要である。しかし、考へては觀、觀ては聞き、また考へる、といふことはなほさら必要なことと思ふ。

同じ一つの法律しか布かれてゐない日本の内部においてさへ、それは極力排撃されねばならない遺憾なことではあるが、しかし衆知のやうに、とかく經濟もちろん、今日までいはずの論理が、經濟の倫理を白眼視しがちである。いはんや、こゝ上海の租界のやうに、異なる數個の法律の行はれてゐるやうなところでは優勝劣敗、弱肉強食、「經濟」の論理は、まだまだ白日の下に強く行はれてゐる。日本の人口の密度よりもなほ周密な揚子江の流域に集る中國民生とその物資とは、こゝの上海で、經濟の論理の波のまに／＼凌らはれてゆくやうに思はれてならない。

識つて、一たび上海の治安に思を馳するならば、善きにせよ、悪しきにせよ、租界の役割また輕々としないであらう。これを理解することは、しづかに中國の政治・戰爭・文化のプロファイルを凝視せんとする者のみに許された特有である。

あれを思ひ、これを考へれば、中國を救ふものは、現實の生活そのものゝ向上であり、倫理化でなければならぬであらう。それゆゑ、經濟の倫理化は、一片の空念佛であつたり、單なる觀念であつてはならないのである。その基礎を經濟の論理の上にシツカリ置き

ながら、より高く、より大きな獨自の指標に邁進せねばならぬのが、東亞經濟の倫理である。少なくとも私には、そう思はれてならない。

日を見をしてゐる支那の巨大な民族資本や華僑から送られてくる金を、よく新政權の國策に歸順せしめ得るものは、前に述べた様な經濟の論理を通じて行はれる經濟新東亞の理想と倫理をおいて、外にはないであらう。(未完)(私の旅日記より一月七日はいかる丸にて)

昭和十五年 追再試験卒業生氏名

専門部第一部

法律學科 三島 俊彦(兵庫)

經濟學科 坂口 健次(大阪)

商業學科 谷 肇(京都) 上島 正治(大阪)

小西 要(兵庫) 寺尾 正義(大阪)

三宅 孝(大阪)

専門部第二部

法律學科 六村卯三郎(大阪) 沼田 武夫(大阪)

岡田 譽利(愛媛) 吉川 喜三(奈良)

山本富久治(和歌山) 松尾 吉直(愛媛)

近藤 晋男(徳島) 佐竹 敬司(大阪)

足立謙一郎(兵庫) 樋口 鏡一(大阪)

中山 祐二(兵庫) 森定 恒義(大阪)

商業學科 龜井 木(福岡) 霞末 利幸(大阪)

永澤 勝一(栃木) 玖島 正名(鹿児島)

笹岡藤四郎(大阪) 三藤 重陽(大阪)

國漢科 上中 通夫(兵庫) 徐 成 萬(朝鮮)

英語科 清水 清(山口)

新刊書架に拾ふ

來島志朗

日本の性格の基礎理論

鈴木重雄著 幽顯哲學

理想社刊

さきに大著「日本精神生成史論」三卷を上梓して國史の立場から日本精神の形相と本質を明らかにした鈴木氏の手になる本書は、氏の其後數年の深刻の賜であり、それは同時に著者の「生の哲學」、力の哲學への理論的體験の告白である。日本歴史は世界創造の思想を以て始められると主張する著者は世界を創造の力、即ち幽として把握し、このものゝ自己限定に現實の世界生活を發見せんとして日本固有の力の世界觀に想到し、其處に日本精神の根本構造解明の鍵を見とめようとするのである。

著者に依れば「凡ゆる文化の領域に亘り觀照により摺り得たるところの觀念的なるものは、實はこの動の世界、力の世界の部分を撮影したものに外ならぬのである。自然科学の如きも今後漸次靜より動に進み入ることと思はれるが、世界を動の世界と解してその理を闡明し、凡ゆる學に究極の基礎を與へるものはわが幽顯哲學である」と。

従つて著者に於ては日本的性格は方の世界觀の顯はれの一つであり、それは一方に於て動的實踐的であり

他方に於ては古來各種の靜的思想文化を生かし榮へしめた事實などはそれ自身が力の營みの構造を有つたことに因るとせられる。氏はかような立場から哲學も又物理學が法則的なものゝ基礎を力と認むるに至つたやうに、觀照的なものを在らしめる基礎としての力の哲學を持たねばならぬのであつて、從來兎角日本精神論が單なる事實の羅列に墮し勝ちであつた欠陥を補はんとする啓蒙的述作としての本書の價値は高く評價されていゝと思ふ。

杉正俊著

郷愁記

弘文堂刊

若き哲學者の日記

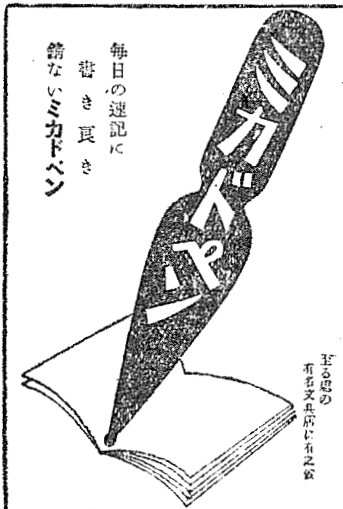
「永遠の形相を觀じてその不朽なる存在性を分有する靈魂の、形相と共に永遠不滅なるべきことをプラトンは、そのプハイドン篇にソクラテスをして輝かしく論述せしめた」……「杉君が逝かれて既に五年を経過したる今日、なほ君が私の心に生きて、君の稀に見る哲學的人格が依然私を動かすのは、君の專攻められたプラトン哲學の眞理が、更らに君と私との靈的交通を理解せしめる所まで自らを具體化しつゝあるものと私には考へざるを得ない」……「しかし君は依然として私の心に生きて私を戒め私を勵ます。靈の交はりに於て君と私とは未だ絶たれて居ないどころでなく、却つて現世の事實の記憶が薄れ行くのに反比例して、益々君の靈魂はその純粹なる姿を私に示し私を動かす」

田邊元博士は恩師の至純至誠の温情を籠めて此書に與へられた序文にこう言つて居られる。

若き新銳學徒杉正俊氏は運命への激しい戦の裡に故國へ魂の生還をした薄命の哲學者であつた。この書は同氏の鋭い熱情を秘めて書き殘された。氏の哲學「運命への戦ひ」の記録である。

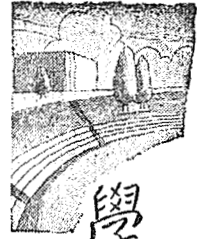
哲學への郷愁、強い學内への情熱、それは現實に躍り出ずる凡ゆる社會事象をば白雲にそゞろ強烈な日光の如く溶し去つて行く。この戦ひとつた苦悶の跡には著者のひたむきな研究の決意がにじみ出て我々は著者の鋭い筆致に心洗はれつゝ讀み行く中に眼頭があつくなつて行くのを如何ともなし得ない。

本書を通じて師友が織り出した師恩と友情の美しき繪模様の中には學園の教授の温い友への純情の縞目も散見される。



毎日の速記に
書き置き
請ないミカドペン

至る處の
有型文具所に行なはば



學内報

靖國神社遙拜式

靖國神社臨時大祭御親拜あらせられる四月二十五日午前十時十五分を期し、學部豫科は千里山學會校庭に於て、専門部は天六學會校庭に於て夫れ夫れ遙拜式を舉行し、殉國の英靈に對し敬虔なる默禱を捧げ、學部豫科は神戸學長より、専門部は正井部長より訓話があつた。

人事異動

四月一日附
講師囑任 (經商學部) 松岡 孝兒
四月十八日附
任學生主事補 (豫科勤務) 田邊 正義
任臨時教練教師兼生徒主事補 (專門部勤務) 河野 初市
依願解職 書記 森田 芳郎
同 書記 木寺 清一
五月二日附
任臨時教練教師兼學生主事補 (學部勤務) 赤石 信二
任關西甲種商業教諭 横山敏太郎
五月四日附

命經商學部勤務

任教授 (經商學部勤務) 講師 三木 純吉

同 助教授 安川安太郎

同 (專門部勤務) 講師 三谷 道麿

同 (同) 同 福島 四郎

任助教授 (同) 同 植田 重正

五月八日附
任助教授 (豫科勤務) 講師 廣瀬 捨三

五月九日附
任教練教師兼學生主事補 中野 勝

同 岡 翠

任書記 (千里山圖書館勤務) 山田 六郎

豫科教務課主任心得ヲ命ズ 書記 谷口 宗一

圖書館天六分館主任心得ヲ命ズ 書記 島山 道雄

千里山圖書館勤務ヲ命ズ 書記 信原 照夫

皇紀二千六百年記念

一億圓(三百年後)寄附



武田宣英氏

本學の前身關西法律學校第一回卒業の本學協議員理事法學博士武田宣英氏は豫て金三千圓を寄附し、武田獎學資金として學生生徒の學術獎勵の資としてゐたが、紀元二千六百年を記念する爲、その目的を變更し、金三千圓を三百年間信託預金とし、元本合せて一億圓に達するを待ち

之を本學の擴張充實に使用せられたき旨申出でられたるを以て、本學にては寄附者の意思を尊重し、忠實に之を實行することゝなつた。

尙同博士は本事業の意義につき次の如く述べられる一、分秒集つて三百年となり、三百年の歳月は金三千圓を一億圓に増殖することに依て時の觀念が養はれる。

一、初の百年よりは次の百年、次の百年よりは其次の百年と加速度的に増殖することは、他面修養の資料となる。

一、信託方法に依り其利殖を計ると同時に貯金報國となり、國家に貢獻することゝなる。

一、此目的達成には敢て苦心經營を要せず、唯誠實に之を守るに依て達せられるが故に、正直、忠實の思想が養はれる。

一、眼前の成功のみに捉はれず、遠大成の思想が養はれる。

一、母校の將來に希望を持つことに依り、愛校心、延いては愛國心が養成せられる。

遠部協議員

獎學資金寄附



遠部逸太郎氏

明治三十九年法科出身の本學協議員、辯護士遠部逸太郎氏は、令息義郎氏(昭十三大法)の一周忌に當り供養として金一千圓也の寄附を申出でられた本學にては之を遠部獎學資金として信託預金となし、其の利息を以て學生生徒の獎學の資となすことゝなつた。

校 友

朝鮮支部

四月十八日午後六時より京城府南山町京城ホテルに於て第十三回春季總會を開催し役員の改選をした。定刻前より龍山室谷部隊入營中の奥野弘之君仁川の山下利君を初め新な出席者も多數あつて各自思ひ思ひに昔話しに花を咲かした。

午後六時過ぎ松本支部長病氣缺席の報に接し岡本顯問代りて議長となり開會の辭と共に本會の發展を祝して挨拶を述べ、野田幹事より昭和十四年度庶務會計の報告あり全員異議なく承認し、役員の改選を諮りしに満場一致松本支部長の重任を決議し幹事は支部長に一任し左記の通り指名選任す、更に會員の親睦を一層計る爲め毎月例会開催の件支部會旗作製の件等を決議し懇親會に移り各地校友よりの祝電並祝辭の披露あり、一同祝盃を重ねて歡談盡きざりしも九時過ぎ一同起立して學歌を高唱し終りに吉田顯問の音頭にて關西大學の萬歳を三唱して盛會裡に散會した。

- 當日の出席者三十九名(卒業年度順)
- 信田 芳 岡本 至徳 吉田平治郎
 - 松村 作二 高橋 伊平 野田 博
 - 三上 吉隆 江藤 榮七 久田 一榮
 - 小松 勝馬 岸本 忠雄 斐田 二郎
 - 大川 正雄 伊藤 國雄 徳田 豊次
 - 今島 實治 秋山 雪太 曾根 三郎

- 役員並事務所
- 顯問 岡本 至徳 吉田平治郎 寺川 三藏
 - 末廣 清吉 信田 芳 齋 鎮
 - 松田 清
 - 支部長 松本 正寛
 - 幹事 高橋 伊平 大幸 明 野田 博
 - 三上 吉隆 江藤 榮七 久田 一榮
 - 大川 正雄 伊藤 國雄 徳田 豊次
 - 木原 安彦 飯田 守 辻 明
 - 石崎 儀二 黒田 一男 川島 通利

福岡支部

福岡支部春季例会を四月十四日福岡市外加布里此の里に開く。午前十一時會員今川橋々時に集合一同バスに乗り沿道糸島海岸風光絶佳なるを賞しつゝ談笑の内に加布里に著く、會場此の里に於ける最も風光絶佳なる海上に浮ぶ室を選びたるも、生憎朝來の曇天加ふる

大陸・戦線・通信

前略、小生は従來神戸にて貿易商を営み居候處、長男平田富朗は一昨年七月十二日丁度支那事變勃發と同事應召、朝鮮鯉登部隊として足掛け四年(滿二ヶ年牛)目下〇〇部隊神崎隊に御奉公致居候、二男平田善朗は一昨年丸山部隊として出征、未だ一彈も受けず無事御奉公致居候關係上、老骨最後の御奉公として天津憲兵隊に外交事務に従事致居候。

御承知の通り天津は外國軍隊米、英、佛、伊軍あり又外交官として各國の公使領事館の存在致居候爲め、小生永年来國に滞在致候關係上少し英語が御役に立ち喜び居候、米英は勿論、佛、獨、伊其の他の外交事務及び交渉は全部英語にて間に合ひ申し、小生として一層御奉公致居候(後略)四月十二日

日本憲兵隊天津驛隊
平田 蕃 一 郎 (明四三 善朗)

前略、其後依然元氣にて現在〇〇地區警備隊長として愉快に服務致して居ります、部隊へ參つてから早や一月此間討伐も三回體験致しまして志氣益々旺盛であります、現在警備を主としてゐる關係で仕事も豊富で討伐は勿論檢船檢問檢索から電話線の補修、道路の新設、架橋、陣地の補修等々相當多忙にて休日等はおるか夜も盡も御座いません、然し兵隊は眞面目に積極的に服務し協同一致の美點を發揮してくれれます。

當江南の地域一帶は氣候も内地とさほど變りませんが朝夕寒暖の差は大陸だけに相當はげしくボカ／＼し

に西の寒風強く風光を擅にする能はざるを遺憾とす。午後一時開會支部長池田重吉氏は一場の挨拶をなし、新に東京より福岡地方裁判所判事に就任せられたる深谷茂氏を紹介し直に宴に移る。會員は燒芋時代の昔に返り漫談放言に歡を盡し有名なる女將の如才なき接待振りに時の移るを知らず其間にあつて住友銀行の宮崎久樹氏は釣道具を携帶して朝より來られ、波浪高き海にて數十尾を獲らる、やがて五時に及びしかば一同母校の萬歳を三唱して散會せり。

因に支部會員氏名左の如し

（いろは順）

- 池田 重吉 深尾 茂 宮崎 久樹
- 馬場 圓吉 八田 薫 古賀 肇
- 諸隈元治郎 諏訪藤之助 星野 俊一
- 上田 荒 笠 達恵 泉 駿一
- 長本 元男 大場 猛男 高山 朋一
- 井上以知爲 不破美太郎 森 耕二郎
- 渡邊 信男 藤下 政治 宮内 吉美
- 青岡 直之 本宮 久吉 本庄 七郎
- 丸山 彌三 土方 一男 磯田 英夫
- 嶋井 辰夫 内田 昌生 笠原 宗將
- 谷口 清水 松井 信一 相馬慶三郎
- 森田高太郎 森重 善一 片岡 武彦
- 島岡春三郎 青木 由郎 納所 孝

大連支部

秀麗會例會三月二十日午後六時より海務協會にて開催の秀麗會第四十七回例會はいつもの顔觸れ乍ら、最近暫く會ふ機會を持たなかつた高木さん出席された

のは特筆に値する、伊豆の大島に現れたかと思へば、今日宮島明日は臺灣全く神出鬼没？五寸釘の虎をも顔負けするやうな雲水振りで、今度は印度のガンヂス河邊りからお便りを頂戴するかも知れない昔の雲水は野に臥し托鉢して門毎に草鞋錢を乞ふたものであるが昭和の雲水は小使錢の千圓も懐に入れて振り擧丸でぶらぶらりさても羨しいことである三月の例會は此の高木さんの旅行談で持ち切り和氣瀟々のうちに散會した當日の出席者

- 木村 儀八 高濱 直一 飯田 昇
- 室山宇太郎 高木嘉一郎 萩原 博
- 池内 輝一 北條 茂義 貴村 一雄
- 秀島 全治

送別會

昭和十三年春以來我が秀麗會員となり、例會にはよく出席し亦後輩の世話もよくしてくれた大連税關勤務中の李鴻年氏が今回關稅稅務科長に榮轉し近く赴任するとの報に接したので早速今日迄の友情を感謝し且今後の御活躍を祈ると共に惜別の情を交はしたく四月廿日午後六時より吉野町ライオンに於て簡素ながら送別の小宴を張る、全校友に通知し得なかつたことは幹事としてお詫びして置かねばならぬ、當夜は満鐵新入の荒川彌一郎君及國際運輸入社の橋三郎君の歓迎の意をも含めた會合でもあり、又新京の三宅良孝君が内地から新妻を連れて歸へる途、今日午後大連に着いた處だと顔を見せてくれたことは、母校愛發露の一端なりと吾々は深く感激せしめた。

今晚は更にお目出度さが續く、それは木村さんの御長女が今日東京に於て結婚式を擧げられ、今頃は披露

た日中仕事をすゝみにシヤツ一枚の兵隊が夜歩哨に立つ時は外袴迄着込みます、景色も内地とよく似た處が有り、クリークに囲まれた麥や桑島でのんびりと仕事して居る農民の姿も亦格別な味が有ります、松は少く柳はクリーク端に多く竹林は到る處に見られます、こうした渾しないクリークと農園の中に毎日々々變りなくあらゆる文化と常識からかけ離れて平々凡々に過して居る、之等農民は戦争でもなければどんなにかのんびりしてゐる事だらふと羨しく思ひます。

事變當初戦争恐怖病に襲はれてゐた彼等も今ではすっかり皇軍を信頼し如何なる協力も惜まらず援助してくれます、然しそれ等部落に敵が入ると敵と皇軍との間に入る彼等こそ惨めで頑として口を開かず恐怖におののきます、此の状態から敵の居る事を察知し得るわけ討伐行動が開始されます。

又各隊長は密偵を各所に派して情報の収集に努め其の確實と判断する方面を掃蕩致します。

敵の種類は相當多く殆ど敗敵及び匪賊でありますがなか／＼馬鹿には出來ず軍が突撃せんとするや手にせる手榴彈を發火して自分の足許に踏みつけ櫻花の散る如く壯烈なる自爆を遂げる者も居ります。

一般に吾氣で且樂觀的な支那人を指導して將來滿洲國と肩を並べしむるには相當な日月を要しますが我等に與へられたる唯一の任務であるを思ふ時、益奮勵努力せねばならぬを痛感致します。(三月二十三日)

中支〇〇部隊〇〇部隊菱山隊

少尉 川崎榮太郎 (警門部教練課)

今や輝しき希望の程に中央政府は雄々しくも敢立致

宴の眞最中で賑やかなことであらうとの御披露に接したことである、今晚は當にお目出度の連続である。

平井君起つて送別の辭を述べ今後一層の御健闘を祈れば、李君謝辭に代ふるに將來の抱負を以てす。

送られる人送る人共々に愉快なる穿鬮紙の中に大いに歡を盡ししばしの別れを惜む。

今晚は新しい人がゐるので秀島兄が出席校友の名紹介をなし盡きぬ惜別の情を押えながら李君の御健康を祈り學歌を高唱九時半宴を閉つ。

當日の出席者

- 主賓 李 鴻 年 荒川彌一郎 橋 三郎
 三宅 良孝 木村 儀八 室山宇太郎
 秀島 全治 岩本壽三郎 西本 啓兒
 萩原 博 池内 輝一 北條 茂義
 平井 三郎

斯 文 會

昭和四年専門部文科卒業生より成る斯文會にては、春の集りを去る五月十二日(日)開催した。京阪神在住會員十五名中、出席者八名にて出席率良好、當日は應召中無事歸還された宮崎少尉、並に安川君が母校教授に榮進し、野田君が警部補として十三橋署に轉任された祝賀を兼ねて一日の清遊を猪名川の上流能勢のほとりにこころみた。能勢電山下驛にて車を捨てた一行は山脚瀧咲き、藤波そよぐ川沿ひに蟬の聲を聞きながら遡ること里餘、溪谷はますます狭く、流はますます清く、魚影鮮かに、河鹿鳴く溪間に石を並べて自然の筵席を設け、酒を温め、自家特製の折函を披いて、打寛ろいだ談笑のうちに時を過ごした。

ヤがて腰をあげて歸路についたのが五時、阪急電車にて解散したのが七時すぎであつた。

一行——和田傳三、川内平三郎、神屋敷民藏、米満榮三、野田平三、安川安太郎、安井章吾、宮崎 捨勇

會 員 消 息

池田吉太郎君(昭十五專二法) 東淀川區豊里菅原町一七四に轉居
 石堂 烈君(昭十四專二經) 篠山岡部隊第一機關銃中隊第四班に入隊
 稻井 萬吉君(昭十二 大法) 尼崎市役所を辭し兵庫縣農社寺課へ奉職
 稻葉 通春君(昭十五專一商) 東京市板橋區板橋十丁目二九一八に轉居
 飯河 琢也君(昭四 大憲) 東京府下三鷹町幸禮四六六(電吉祥寺三六五)に轉居
 今西 貞夫君(推) 多年檢事として松山、下關、岡山、廣島各裁判所並に廣島控訴院に活躍された氏は此度退官、辯護士を開業住所及事務所は廣島市饒町一三三、電(中)一五六八
 岩臨 明光君(昭八 大政) 北支河北省無極縣政顧問より、同行唐縣政顧問に轉任
 上田 繁一君(昭十四專二法) 奈良縣八木警察署勤務
 上田 廣藏君(昭十三大法) 専門部講師として民事訴訟法を擔任、豊能郡南島村原田六六四に轉居
 白井 典正君(昭十四大憲) 本年一月應召三重縣津市横田部隊角田隊野々隊に入隊
 大浦 和彦君(昭十五大法) 岩手縣釜石市鈴子町日鐵

しました、聖戦實に三ヶ年、或は時間的には長いものでないかも知れませんが、而し皇國日本にとつても更生中國に取つても實に苦闘の三年でありました、然るに依然歐米に依存せんとする蔣介石の迷夢が未だ醒めざる限り吾等の建的闘争は永久に續くべきであります。

吾等は如何なる困難も自ら進んで之を制禦し新生中國と相携へて最後迄執拗に突進するのみです。

降而小官無極縣政顧問より行唐縣政顧問に轉務を命ぜられました、中央政府成立致しました今日に於て益々其の責任の重大なるを痛感し粉骨碎身以て興亞聖業の礎石となる堅き覺悟で御座います。(五月一日)

北支行唐縣政顧問

岩 臨 明 光 (昭八 大政)

前略、こちらは今雨季にて、毎日雨が降りつゞいて只さへ殺風景な第一線に一層の憂鬱さを投げかけて居りますが、吾々は討役に掃蕩に檢索にとズブ濡れになつて張り切つて居ります、會では學命の電燈の暗い事をかこつたこともあるが、今はローソクとランプで、總てが代用品の生活にも感謝に生きてみます。後略。(四月二日)

南支〇〇部隊書函〇〇號田中潔隊

市 村 惟 夫 (專二商二在學)

前略、當地は早雨季に入り、毎日降つたり、止んだりの鬱陶しい日ばかりつゞきます、平和を好む農民は戦雲をよそに此時ばかりと鈍い水牛を追つて田を耕したり、又苗代田をこしらへたりしてあります。この雨季はまだ二ヶ月はつゞいでせう、一年中の雨が全部降つて了ふのでせう。後略。(四月七日)

南支〇〇部隊書函〇〇號本部

原 豊 (專二法二在學)

株式會社に勤務、住所は同所經營里仁寮内

大川 龍雄君(昭十三專英) 應召をうけ三重歩兵第三十三聯隊第一中隊第二班に入隊

大谷 彌君(昭十四專二法) 中央大學法學部へ入學、住所は東京市向島區吾嬬町西一ノ三〇、小宮方

長 忠治君(昭十專二法) 浪速少年院より東京少年審判所に轉任、住所は東京市麹町區富士見町東京少年審判所

勝谷 武夫君(大二專法) 尾道市主事、産業課長奉職中の處去る三月二十一日逝去、遺族はゆき未亡人と四男一女がある、住所は尾道市久保町西國寺

加藤 數男君(昭十專一法) 神戸市林田區池田村今川二二三に居住

金子 勇美君(昭十二專二商) 小野と改姓、勤務先北區中之島二ノ一〇日本綿花株式會社

川上 猷三君(昭十五大法) 東京市赤坂區青山近衛歩兵第四聯隊第七中隊に入隊陸軍經理部見習士官拜命

本島 倫三君(昭五專商) 昭和十一年一月歩兵第八聯隊に入隊以來引續應召中の處過般歸還除隊となり大阪朝日新聞社會計部に勤務さることとなつた、住所は東淀川區三國町八三九

木下 昌夫君(昭十二專二法) 鞍山市朝日區初音街五段四ノ一一二、勤務は昭和製鋼所總務部人事課

倉中 諍雄君(昭十二專二法) 大阪鐵道局大阪電力事務所を辭し滿洲國高等官試補として大同學院に入學さる、住所は新京特別市南嶺大同學院

小林 英二君(昭九大法) 昭和十五年三月二十六日逝去

小鹿孝之進君(昭十四大法) 大阪第三十七聯隊片山隊

第三班入營

笹山 芳一君(昭十一大法) 奈良縣磯城郡耳成村内膳八木測候所東辻北入西側に轉居、勤は帝國製鐵會社高田工場

鹽川 德藏君(大十五專商) 鹿兒島縣廳を辭し滿洲國佳木斯市三江省公省に奉職、社會股長を勤む

島田 俊雄君(昭十二專二法) 大連市柳町四一滿洲糧穀株式會社大連支店に勤務

鈴木 登吾(昭十四專商) 堺市輜重兵第四聯隊第三中隊第五班に入隊

會我部喬文君(昭十專一商) 北支出征中の處去る十一月十二日戦傷を負ひ北京陸軍病院にて治療中の處去る二月八日戦傷死さる。

相馬慶三郎君(昭八專二經) 東京市麹町區有樂町一ノ二、理研重工業會社勤務

種子島時隆君(昭十大法) 出征中の處今般歸還さる住所は住吉區北島東一ノ一一〇

竹田 雄三君(昭十五大法) 滿洲國吉林省乾安縣乾安街乾安興農合作社に入社

田中龍一郎君(昭十四大法) 千葉縣津田沼町近衛師團鐵道第二聯隊第一中隊第六班へ入營

高見 行雄君(昭十四大法) 大阪歩兵第三十七聯隊家所部隊橋本隊第五班へ入營

辻 義人君(昭十三專一商) 淺野物産株式會社奉天出張所に勤務、住所は奉天大和區加茂町三滿洲電氣商會、三階河野方

寺島平太郎君(昭十五專一商) 京城府南大門通三丁目高瀬合名會社京城支店勤務

難波 春雄君(昭十二專二商) 計理士、神戸市須磨區堀内町二六番屋敷に轉居

西窪重良兵衛君(昭六專法) 東成區深江東五丁目一四四に轉居、目下陸軍輜重兵中尉として堺輜重兵第四聯隊本部に應召中

野口 貞天君(昭十四大商) 應召四月十日金岡輜重兵隊に入隊

福富 重治君(昭二專經) 上海百老匯路二〇九號大陸産業株式會社取締役社長に就任さる

福島政次郎君(昭二專法) 富山縣東礪波郡中田警察署長に轉補

藤田正太郎君(昭十二大法) 大日本紡績聯合會に勤む住所は浪速區東神田町八六二

藤岡 健三君(昭十四專經) 奉天大和區東塔街滿洲飛行機製造會社經理部主計課に勤務

古谷 邦豐君(昭十五大法) 哈爾濱市濱江省公署長官房文書科編查股に奉職

松本 政治君(昭十四專英) 神戸市灘區岸地通二ノ九五ノ一三浦方に轉居

水野 秀雄君(昭十四專二法) 北區東野田九ノ六一に轉居

光石 正次君(昭二專法) 港區西田中町一ノ五六に轉居

宮本 五郎君(大十二專法) 富山縣警察部衛生課主事

矢田 三郎君(昭十四專二法) 和歌山市森田部隊山下隊に入營

吉川千代造君(昭十四大經) 東區法圓坂町奥津部隊高畑隊第六班に入營

若林 茂君(昭十四大法) 大阪輿津部隊伊吹隊第四班へ入營

脇田 武雄君(昭十三專二團) 三軒家第三小學校より阿部野小學校に轉勤、住所は住吉區萬代西六丁目一

本學年度學科目擔任表

法文學部

法律學科

社會學、社會政策	岩崎 卯一
經濟政策概論	磯部 喜一
東洋倫理學	石濱純太郎
信託法	本莊鐵次郎
支那語	與平定世
英法、物權法、法律學演習	和田 豐二
佛語	加藤金次郎
財政學	神戸正雄
法律學演習	吉田一枝
哲學、西洋倫理學	武內省三
保險法	武田藏之助
會社法、手形法、小切手法	竹田 省
東亞問題	谷口吉彦
英法	谷口知平
國際公法(戰時)	恒藤 恭
行政法總論、行政法各論、 法理學、法律學演習	中谷 敬壽
債權總論	中島玉吉
日本文化史	魚澄總五郎
民法、商法總則、商行為、 法律學演習	野村次夫
佛法、國際私法	柳 瀨兼助
民事訴訟法、法律學演習	山田正三

政治學科

支那文化史	矢野 仁一
獨法	山本戶克巳
日本法制史	安井源雄
經濟原論	牧 健二
獨法	正井敬次
債權各論	福島四郎
英法、海商法、法律學演習	近藤英吉
民事訴訟法、破産法	安藤 光
憲法、自治行政	齋藤常三郎
刑事訴訟法	佐々木惣一
佛法、親族法、相続法、法 律學演習	佐伯千仞
刑法總論、刑法各論	木村健助
國際公法(平時)	宮本英倫
民法總則	末廣重雄
	末川 博
社會學、社會政策、政治學、 政治學演習、政治學特殊問 題	岩崎 卯一
工業政策、經濟政策概論	磯部 喜一
政治史	池田 榮
東洋倫理學	石濱純太郎
統計學	總川虎三
信託法	本莊鐵次郎
支那語	與平定世

文學科哲學專攻科

外國經濟事情	和田 信夫
政治學講義	川上 敬逸
簿記、佛語	加藤金次郎
財政學	神戶正雄
政治學史	吉田一枝
哲學、西洋倫理學	武內省三
簿記、商業政策	瀧澤喜子雄
會社法、手形法、小切手法	竹田 省
東亞問題	谷口吉彦
國際公法(戰時)政治學特殊 問題	恒藤 恭
行政法總論、行政法各論、 法理學	中谷 敬壽
植民政策	中村真之助
親族法、相続法	中島玉吉
日本文化史	魚澄總五郎
商行為、商法總則	野村次夫
政治學	黑田 覺
國際私法	柳 瀨兼助
支那文化史	矢野 仁一
獨語	安井源雄
經濟原論	正井敬次
日本法制史	牧 健二
政治學講義	藤本進治
債權總論	福島四郎
日本經濟史	黑正 巖
海商法	安藤 光
農業政策	赤羽豐治郎
憲法、自治行政	佐々木惣一
債權各論、物權法	齋藤常三郎
民法總則	木村健助
刑法總論、刑法各論	宮本英倫
國際公法(平時)、外交史	末廣重雄
社會學、社會政策	岩崎 卯一
政治史	池田 榮
東洋倫理學、支那文學	石濱純太郎
美學	井上隆證
社會學特殊問題	服部英次郎
拉與語、倫理學	西田長左衛門
東洋哲學特殊問題	堀 正人
文學概論	大小島真二
認識論	岡 道固
心理學	澤瀉久敬
哲學史特殊問題	片山正直
西哲思想史、哲學演習、宗 教學	神戶正雄
財政學	武內省三
哲學、西洋倫理學、哲學演 習、倫理演習	高濑武次郎
東洋倫理學	中谷 敬壽
行政法總論	黑田 覺
政治學	矢口孝次郎
文明史	安井源雄
獨語	前田聽瑞
印度哲學、宗教學特殊問題	正井敬次
經濟原論	藤本進治
佛語、哲學演習	佐々木惣一

教育學、教授法
 東洋哲學思想史
 哲學講義、西洋美術史、
 論理學、論理特殊問題
 國文學
 三枝樹正道
 新町徳之
 菅 守 常
 鈴木周作

文學科英文學專攻科

支那文學 石濱純太郎
 美 學 井 島 勉
 言語學 今川太郎
 ラテン語 服部英次郎
 文學概論、英文學 堀 正 人
 英文學 細 江 逸 記
 獨 語 大小島眞二
 心理學 岡 道 固
 西哲思想史、宗教學 片 山 正 直
 佛 語 加藤金次郎
 哲 學 武 内 省 三
 英文學 村上喜貞
 英語學 グレン・シヨウ
 文明史 矢口孝次郎
 獨 語 赤羽豐治郎
 教育學、教授法 三枝樹正道
 西洋美術史 菅 守 常
 國文學 鈴木周作

社會學、社會政策

經濟學科

岩崎卯一



經濟政策概論、工業政策、
 英語經濟學研究、經濟學演習
 政治史
 東洋倫理學
 經濟學史
 統計學
 信託法
 支那語
 外國經濟事情
 佛 語
 會計學、簿記、佛語
 國際公法
 財政學
 英語經濟學研究、交通經濟
 憲法、行政法總論、行政法
 各論、政治學史
 簿記、商業政策
 哲學、西洋倫理學
 經濟史、經濟演習
 海 商 法
 會 社 法
 國際經濟論、東亞問題
 損害保險論
 景氣變動論
 經濟地理、植民政策
 親族法、相続法
 經營經濟論
 日本文化史
 倉庫論

磯部喜一
 池 田 榮
 石濱純太郎
 石川興二
 滝川虎三
 本莊鐵次郎
 奥平定世
 和田信夫
 賀來俊一
 加藤金次郎
 川上敬逸
 神戸正雄
 河村宣介
 吉田 一 枝
 瀧澤喜子雄
 武 内 省 三
 田邊信太郎
 武田藏之助
 竹 田 省
 谷 口 吉 彦
 瀧 谷 善 一
 中川庸太郎
 中村良之助
 中島玉吉
 村本福松
 魚澄惣五郎
 野村次夫

保險論、保險政策
 政治學
 日本經濟史
 國際私法
 支那文化史
 獨 語
 經濟學、金融論、經濟學
 貨幣論
 債權總論
 商法總論、手形法、小切手法
 獨語、農業政策
 破産法、信託各論、物權法
 民法總論
 刑法總論、刑法各論
 外國爲料、商業數學
 銀行論、金融論、商業學演習、英語經濟學研究
 外 文 史
 簿 記
 會計監査
 社會學、社會政策
 經濟政策概論、工業政策、
 經濟學演習
 東洋倫理學
 信託法
 支那語
 商品學
 物權法
 野口正造
 黒 田 覺
 黒 正 殿
 柳 瀬 兼 助
 矢 野 仁 一
 安 井 源 雄
 正 井 敬 次
 松 岡 孝 兒
 福 島 四 郎
 安 藤 光
 赤 羽 豐 治 郎
 齋 藤 常 三 郎
 木 村 勉 助
 宮 本 英 倫
 三 木 純 吉
 森 川 太 郎
 末 廣 重 雄
 藤 文 吉
 陶 山 誠 太 郎
 岩 崎 卯 一
 磯 部 喜 一
 石 濱 純 太 郎
 本 莊 鐵 次 郎
 奥 平 定 世
 大 平 頼 母
 和 田 豐 治

商業學科

外國經濟事情
 佛 語
 商工經營論、會計學、商業
 演習、簿記、佛語
 交通經濟論
 國際公法
 憲法、行政法總論、行政法
 各論
 商學概論、簿記、英語經濟
 學研究、商業政策
 西洋倫理學
 商業史、經濟史
 海 商 法
 會 社 法
 國際經濟論、東亞問題
 損害保險論
 景氣變動論
 經濟地理、植民政策
 親族法、相続法
 經營經濟論
 日本文化史
 倉 庫 論
 保險論、保險政策
 日本經濟史
 英語經濟學研究
 國際私法
 支那文化史
 獨 語
 經濟學、金融論、經濟學
 演習
 貨幣論
 和 田 信 夫
 賀 來 俊 一
 加 藤 金 次 郎
 河 村 宣 介
 川 上 敬 逸
 吉 田 一 枝
 瀧 澤 喜 子 雄
 武 内 省 三
 田 邊 信 太 郎
 武 田 藏 之 助
 竹 田 省
 谷 口 吉 彦
 瀧 谷 善 一
 中 川 庸 太 郎
 中 村 良 之 助
 中 島 玉 吉
 村 本 福 松
 魚 澄 惣 五 郎
 野 村 次 夫
 野 口 正 造
 野 口 正 造
 黒 正 殿
 矢 口 孝 次 郎
 柳 瀬 兼 助
 矢 野 仁 一
 安 井 源 雄
 正 井 敬 次
 松 岡 孝 兒

經濟學科

經濟原論	法則特殊問題	社會學	工業政策	獨語	政治學	商業政策	倫理、哲學	憲法	交通論	商業通論、商業政策	保險論	經濟地理、植民政策	外國貿易、海外經濟事情、英語	東亞問題	倫理學	商法、會社法	日本經濟史、經濟史、英語	特殊經濟問題	支那語	農業經濟、農業政策、經濟學史	手形法、小切手法	支那語	取引所市場論、英語	統計學	獨語	銀行爲替		
森川太郎	末川博	岩崎卯一	磯部喜一	與宮精一	和田豐二	川上敬逸	河村宣介	片山正直	片岡基太郎	吉田貫一	吉川貫二	瀧澤喜子	瀧谷善一	中村長之助	中川庸太郎	長岡克曉	中西章	國歲胤臣	矢口孝次郎	古屋美貞	黃廷富	赤羽豐治郎	安藤光	有馬健之助	佐伯三郎	菊田太郎	三谷友吉	三木純吉

高等商業學科

佛語	財政學、社會政策	經濟原論、英語	工業政策	商業數學、商業英語	獨語	手形法、小切手法	民法總則	修身、哲學	商業簿記、經濟學	商業政策、保險論	英文	交通論	商業通論、商業歷史、商業政策	商業地理	海外經濟事情、外國貿易、英語	東亞問題	心理學、論理學	法學通論	倉庫稅關論	商法、會社法	英語	獨語	獨語	經濟原論			
三木治	三谷道麿	廣瀬捨三	磯部喜一	西村勝太郎	與宮精一	大橋光雄	和田豐二	片山正直	加藤金次郎	河村宜介	河村信一	片岡基太郎	高橋盛孝	吉川貫一	瀧澤喜子	瀧谷善一	中村長之助	中川庸太郎	長岡克曉	中西章	植田重正	野村次夫	國歲胤臣	矢口孝次郎	安川安太郎	安田恭平	正井敬次

專門部第二部 法律學科

特殊經濟問題	支那語	支那語	商業史、取引所市場論	統計學	商業英語	銀行爲替	佛語	珠算	財政學	獨語	英語	銀行簿記、工業簿記、原價計算、會計監査	會計學、會計監査	社會學	物權法	民法總則	論理學、倫理	會社法	論理學	獨語	行政各論	國際公法、英語	佛語	英語	東亞問題	憲法	
古屋美貞	黃廷富	有馬健之助	佐伯三郎	菊田太郎	水谷揆一	三木純吉	三木治	三島律夫	三谷道麿	三谷友吉	須藤文吉	須藤文吉	陶山誠太郎	岩崎卯一	入江真太郎	石田文治郎	井上隆證	原田鹿太郎	西村嘉三郎	西田讀文	與宮精一	渡邊宗太郎	川上敬逸	賀來俊一	片岡基太郎	加古撤次郎	吉田一枝

經濟學科

保險法	英語	行政總論	刑法各論	民事訴訟法	商法總則、商行學	國際私法、親族法	手形法、小切手法	經濟原論	法制史	法學通論、相續法	民事訴訟法	支那語	海商法	獨語	支那語	債權總論、債權各論	破產法、和議法	刑法總論	佛語	財政學	英語	民事訴訟法	法制特殊問題	哲學	社會學	工業政策	論理學			
武田藏之助	田邊清市	中谷敬壽	村上喜貞	植田重正	上田廣藏	野村次夫	柳瀬兼助	八木弘	正井敬次	牧健二	福島四郎	小山慶作	黃廷富	安藤光	赤羽豐治郎	有馬健之助	坂本憲三	齋藤常三郎	宮本英脩	三木治	三谷道麿	廣瀬捨三	關豐馬	末川博	菅守常	鈴木富太郎	岩崎卯一	磯部喜一	井上隆證	西村嘉三郎

學術研究會聯盟

學術研究會聯盟は昨年秋結成されてより早半歳、其後内外の批判の中に銳意その基礎の確立に努めつゝあるが、最近學園の設備内容の充實が熾烈に要望されて

ある時、そして本學が沈滞より抜け出てよき方向に進みつゝある時、我々が其き環境に順應する良き學生たらんがために『勉強しよう會』たる經法商各研究會、そして學聯の役割は誠に重大であり、ここに研究會の特殊な存在意義と價値を認めねばならない。

本年度事業の具體的なるものとして考慮されつゝあるものは、學聯として一、紀元二千六百年を記念する大講演會

- 一、合同討論會
- 一、合同研究發表會

等でのほか經友會、法理研究會、商業専門研究會等では着々事業計畫を遂げ、すでに有意義な活動を開始してゐる。

四・一八 石井記

經友會

經友會は去る四月五日の委員會に於て本年度事業計畫を左の如く決定した。

本年度事業を大計的計劃的に樹立し、その主眼點を經濟學研究の方法論把握に置く。

依つて事業を一應各部に分割、更にそれを綜合的に有機的に遂行する。

尙それと共に經友會の精神的統一、經濟學科の大同團結を圖るを目的とする。

(總務部)

一、四月下旬、十一月月上旬總會開催。

(研究部)

一、研究發表會

(本年十二月迄に約十回、現實經濟感の諸問題及び經濟理論を交互に取上げ討論す)

一、『國富論』解讀會

毎水曜、二時限終了後三十三號教室

一、翻譯 カニンガム『英國資本主義的發展』新聞、雜誌

一、論文募集

(本年十月末迄經濟學に關する論文を任意に募集)

例年の如く夏季休暇中に出席募集適當の方法を以て表彰す

(編輯部)

一、經友會四ヶ年史編纂

學友會新聞に掲載の豫定

一、經濟濟民發行

二號六月、三號九月、四號十二月 (事業部)

一、課外講座

經濟學研究の方法論理解の爲毎月一回約二時間左の計劃により開講す

四月 經濟學の方法論につき 磯部教授

五月 重農學派の方法論につき 赤羽教授

六月 正統學派の方法論につき 堀 講師

七月 歴史學派の方法論につき 矢口教授

九月 限界効用學派の方法論につき 森川教授

十月 社會主義派の方法論につき 磯部教授

十一月 最近の經濟學說の方法論につき 堀 講師

十二月 總括的に結論として 中川教授

二、名士招待講演會

本年は五月、七月、十月の三面開催の豫定

三、合同茶話會及見學

四月下旬十月月上旬に舉行

商業研究會

本會も五星霜を経て、會員も多數で申

分無く内には質、量ともに充實し、外に名聲とみに上り正に皇國の二千六百年とともに力強い巨歩を遂げつゝあることはまことに頼もしき限りであり、日本歴史の一劃新时期に當り本會の利益々重々道たる愈々遠きを思ふのであるが、一層奮勵努力以て目的達成に邁進せんとするものである。

四月二十三日 新入會員を迎へて社會見學を『大阪朝日新聞社』にて行ふ、出席者三十五名。

新聞は大きなショックにより發達して行くものであり、今事變、第二次歐洲大戰により全盛時代を誇つてゐるのである。社全隅々迄見學し、分業・機械文明も眺はれて有意義に見學を終へた。

四月二十九日 天長の佳節、青空の下に新入會員歓迎及親睦のため生駒山コースにてハイキングを舉行せり、新緑の下でオゾンを感じつゝ一團となり登つて行く愉快さ、又食糧の一刻の樂しき、談笑程に一日を過すことが出来た。

會長森川教授病氣缺席のため歓迎會が延びてゐるが先生が登校されしだい聞く豫定である。會の計畫も出來我々はたゞ邁進するのみだ。

懸賞論文募集

左の要項にて論文を募集するに付、多數應募されん事を切望す。

- (イ) 論題は商業經濟に關するもの
 - (ロ) 一人一編の事
 - (ハ) 四百字詰三十枚以内の事
 - (ニ) 締切九月十五日限り
 - (ホ) 論文は一切返却せず
 - (ヘ) 入選論文には記念メダル進呈
- 商業研究「第八號」に掲載す。この八號は紀元二千六百年記念號にて大段的に發行する豫定である。

東亞研究會 (専門部)

四月二十七日(土)

本會昭和十五年度の新入會員を迎へるに當り宇治電ビル地下食堂に於て歓迎會を開催せし處今回新會長に就任された中村長之助教授を初め顧問澤村幸夫先生及び先輩諸氏の御列席を得て盛大に春季會合を舉行す。

澤村先生先づ本會の行事を祝されたいで支那を中心とする經濟、地理、文化、風俗、習慣等に關する有益なる講話があり、終つて新會長中村教授の御挨拶、各幹事の事業内容報告後座談會に入り、かくて春雨窓打つ夜和氣騒々裡に始終し最後に學歐唱和、有意義なる歓迎會を閉づ出席會員四拾五名。

五月二日(木)

晩春の此日午後三時より大阪中之島堂ビル九階に於ける滿洲國名譽領事主催滿

洲國皇帝陛下訪日宣詔記念式に參列、感銘深遠式典後交聯會に出席、學び得る所大なるを欣ぶ。

當日出席者 幹事長 河本 繁 三
總務 楠崎 優

國語漢文學會

△飛鳥史蹟見學

紀元二千六百年の記念すべき年に當り肇國の大業を讃仰し、皇國の彌榮を祈念する爲め榎原神宮に參拜し、かねて飛鳥史蹟の見學を五月五日舉行した。前日の降雨のため參加人員こそ尠なかつたが、奈良縣史蹟調査委員新井和臣氏の御案内にて、先づ第二十九代欽明天皇棺隈坂合

陵に參拜、それより畦道づたひに鬼の窟の狙と呼ばれる石櫛を見學、第四十代天武天皇、第四十一代持統天皇棺隈大内陵に參拜す、西方には萬葉集に謳はれた佐田の丘、眞弓の丘が見渡される。それよりお龜石を見て櫛寺に至り、飛鳥の古部を一時に望まれる同寺の方丈にて中食後、新井氏のテキストと臨地の歴史的な考證解説は吾々をして宛ら千餘年の昔にかへり、大宮人の佛を彷彿たらしめるものがあつた。ついで川原寺の白瑪瑙の礎石を見て、その昔の壯麗な規模の殿堂をうかがひ、ふち瀬定めぬ飛鳥川にそひて石舞臺にいたる。説明によれば石舞臺は

蘇我馬子の墓らしく、上圓下方の墳形にて上圓部直徑一百尺、下方部全面積約二千一百坪、すばらしきものにて遠からず復原を見るときかの事である。道を飛鳥大佛の方にとり、酒船石を見て、飛鳥寺に至り、聖德太子が打鞠を行はせられた折中臣鎌足御靴をさしげられ遂に蘇我氏討伐の御謀をめぐらされたその昔を偲び、遠飛鳥宮趾、岡本宮趾、淨御原宮趾、豊浦寺趾、向原寺趾より第八代孝元天皇劔池嶋上陵を遙拜し、有意義ある見學を了した。尙詳細は會誌第三號誌上に掲載の豫定である。

辯論部 (専門部一)

時代の大旋風は全世界に震々と吹き荒びその中を一路、一億の民が神聖博大な民族使命達成に邁進する時我が一部辯論部は、一つは天業の翼賛に、一つは愛校の情鬱勃たる先輩諸兄に答へべく第一回校外大會を神部津市に開催せり。

日時 五月四日 午後六時
場所 津市 石水會館

當日は雨天に係らず、先輩諸兄の御靈方に依り、又時流愈々複雑を極める時、北斗の星を求めんとする自然的要求に依り五時頃より繰々入場し聽衆實に八百を越ゆる盛會裡に部員一同の熱烈血を吐く憂國の叫びは必ずや津市民の心に感銘と共

鳴とを與へたるものと確信す。又津市在住の先輩に母校體在りの意を深からしめた。翌五日佐伯指導教授に引率され部員一同伊勢大神宮參拜、歸路につく。この麗日の我が部の上に誇が舞ふ悠久を。

出場辯士 佐々木利男(司會)

- 中谷定夫、北野繁太郎、朴南七、今井隆久、奥村寛、伊藤喜衛、中尾重治、山本三郎、福田久夫、中村信也、水谷和義、堀越源治郎

航空部

我が航空部春季合宿訓練は三月十六日より殘寒尙酷しき湖東〇〇飛行隊に於て實施された。全員初年兵待遇を受け二週間にわたり兵營生活を續け朝夕内務規定を遵守し軍人精神の體得に務め、晝間積雪三寸の飛行場に於て懸命の飛行訓練を勵んだ。斯くして精神的に又技術方面に多大の効果を收めることが出来た。

昨年度始めより現在までの免狀受有瘦得者は次の如くである。

- 十四年六月 一級滑空士 岸上 正次
- 八月 二等操縦士 岸上 正次
- 二等操縦士 稻本 稔英
- 十月 二級滑空士 山村 彰
- 二級滑空士 萬谷 葆

十五年二月 一級滑空士 山村 彰

四月 二等操縦士 山村 彰

本年三月の卒業生の内岸上、稻本、萬谷、市岡の四名は陸軍操縦幹部候補生を受験され、後體格検査表を除くのみとなつた、四君が大陸の碧空を陸の荒鷲として縦横に活躍せられるのも近き日であらう。

陸上競部

皇紀二千六百年四月十四日大阪市立運動場に春シーズンのトップを切つた關大對大阪商大對抗陸上競技會は、昨夜來の豪雨も忘れられた如き絶好の試合日和に開始され、シーズントップの不調も何處へやら、さすが陸上界の王者關大の牙城微動だにせず、こゝに四十四對十三にて四連勝の榮冠を得、主將門田、大室の堂々たる新記録と共に等先き其きスタートを切つた。

關大軍成績左の通り。

- 百 米 ①林 十一秒三
- ②杉 田 十一秒六
- 四百 米 ①門 田 五十二秒八新
- ②鈴 木 五十五秒三
- 八百 米 ①門 田 二分三秒二新
- ②瀬 島 二分九秒六
- 高 障 碍 ①大 室 十六秒三新
- ③林

八百米繼走 ①關大軍 杉田、鈴木、青木、林 一分三十八秒〇

走 高 跳 ①大 室 一米八〇

砲 丸 投 ①林 十一米五〇

走 巾 跳 ①大 室 六米九一

②小 倉 六米三七

③青 木 六米三五

円 盤 投 ①大 橋 三三米〇九

③林

棒 高 跳 ①増 田 三米〇〇

③大 橋

神戸市御大典記念市民運動場開場記念

第八回全國總走選手權大會

左記成績にて終了

期 日 昭和十五年四月二十九日

場 所 神戸市民運動場

種 目 〇四百米繼走

一着 關大チーム 四五秒六

(大室、長田、鈴木、青木)

二着 關學チーム

〇三千二百米繼走

一着 關大チーム 八分四四秒〇

(白井、岡本、瀬島、門田)

二着 關學チーム

庭 球 部

小島組堂々優勝す

シーズンズのトップを切つて三月二十四日南海沿線中百舌島コートに日本庭球聯盟大阪支部主催大阪府支部選手權大會が舉行された。快晴無風の絶好のコンディションの下に熱戦が繰げられ、左記戦績で小島・勝部・關大組が榮ある大盃を獲得し第七回の優勝者となつた。

尙副將井上・武内・關大組が第一シードを破つてセミファイナルに進んだ躍進振り目覺しかつた。

二 回 戦

〇小 島 (關) 4-2 田 中 (大阪)

〇井 上 (關) 4-0 栗 谷 (俱)

〇武 内 (關) 4-1 宇 崎 (大)

〇小 島 (關) 4-1 岡 崎 (大)

〇勝 部 (關) 4-1 池 田 (大阪)

〇武 内 (關) 4-2 西 寺 (大阪)

〇小 島 (關) 4-1 飛 田 (大阪)

〇勝 部 (關) 4-2 谷 藤 (球)

〇高 橋 (大) 4-3 武 内 (大)

〇勝 部 (關) 4-1 高 橋 (大)

〇小 島 (關) 4-1 高 橋 (大)

〇勝 部 (關) 4-1 高 橋 (大)

2 甲子園國際庭球俱樂部主催、大阪朝日新聞後援の早起庭球(硬式)は四月一日より十日間甲子園コートに舉行され本學より小島、谷村兩君出場、小島君堂々の演技は硬球に於ても異彩を放ちベテラン川上の上に8-7で惜敗し無念優勝を逸せしも九勝一敗の好成績を挙げ、谷村君

は六勝四敗であつた。尙兩君も猛練習の上目下五月の早起大會へ参加中である。

3 井上組優勝す

武内組優勝す

櫻花薫る四月七日第十五回兵庫縣下級軟式庭球大會(於神戸市民運動場)へ(井上・武内)・(若林・清水)の兩組を派遣、井上武内組劈頭より完璧の當りを示しストレートの超記録を樹立し優勝扇港に其驍名を馳せた。

三 回 戦

〇武 内 (關) 3-0 横 山 (學)

〇清 若 (林) 3-2 網 川 (國)

〇武 内 (關) 3-0 本 島 (教員)

〇清 若 (林) 3-2 網 川 (國)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

〇武 内 (關) 3-0 井 上 (教員)

〇清 若 (林) 3-0 井 上 (教員)

陸上競技部のこころ

S M 生

我關大陸上部の歴史も二十年になる、競技シーズン初頭に方り過去を振り返り多くの先輩が歩み來つた荆棘の道を辿り今沈滞の淵にある部の選手諸君に奮起を促したいのである。

我國に於ける陸上競技界の盛衰は吾陸上部の盛衰と殆んど其軌を一にしてある、我國の陸上界の股肱且つ強方であつた八年前のロサンゼルス大會に大島、長尾を四年前のベルリン大會には大島、長尾、谷口、戸上福田を送り我關大の名を遠く海外に迄轟かした。

斯くの如き黄金時代を現出し、野球部と共に運動王國關大の名を天下に博したものである。然しローマは一日にして來らずの古語の如く、それに至る迄の先輩諸氏の辛苦も重大ではなかつた、創業の藩みを荷つた金田格、而して最初産れたのが當時の中距離界の至寶岸源左衛門、短距離の福田義泰、走幅跳の木下恒雄であり、其後年と共に花谷猛、中澤四郎、古川親、谷上茂、津田晴一郎、矢柴泰雄の諸君であつた、中にも岸、津田、矢柴の中長距離陣は當時早慶の羨望の的であつた。以上の陣容を以て關西インターカレッジ第五回大會に臨み、宿敵關學、京大、神商大、同大を撃破し初の覇權を握り、中でも今尚吾々の臍に浮ぶは當時新人たりし津田が血を吐き肉裂くる迄奮闘し千五百に四分三十秒、五千に十七分餘の好記録で優勝し競技界の先聲をして顔色なからしめた事と、千六百續走に第三走者迄二十餘米離されて第三位にあつた關大がアンカー岸の手にバトンが渡るや力走又力走遂にゴール數米前に於て前走者を抜き去り優勝した。當時の學生は愛校心熾烈にして團結力強く千餘の學生が應援團を組織

して聖陽校横巻大佐(後少將にて歿)引卒の下に盛勢旗を先頭に堂々大阪市中を行進したものである。

其後京大勢の擡頭物凄く加之津田、矢柴、慶早に去るに及んで昭和五年迄京大に覇權を讓つた。昭和三年春、今は歐洲戦亂下に報道戰士として健筆を奮つて居る中野界の麒麟兒大島録吉君情義を重んじ他校の勸誘を斥け來り投ずるに及んで陸上部の再興に専念し、又之を助くるに智將佃宇兵衛を以てし、川岸兵二、城戸壽彦、長尾三郎、藤枝昭英、小西秀夫以下を入部せしめ遂に昭和六年京大より覇權を奪還し其後も黄金時代を形成し、昭和七八九年谷口藤生、福田時雄、戸上研之、古田康二、中島直矢、木下敏夫、小椋真佐己、富谷利一、川手輝典等中等競技界の一流選手入學し其技は益々圓熟し、當時天下を四分し早慶京と共に爭覇時代を現出した、が然し遂に全日本覇權を掌中に收め得ず今日に至つた。關西大會では昭和六年以來八ヶ年連勝の譽を擡ひ昨年關學に覇を成さしめ關大老ひたりの感を深くした。今過去を振り返つて最も慨嘆久しくするのは全日本の覇權を早文の手より一度も奪ひ得なかつたことである

昭和十年前後の陣容は谷口、川手、小椋等十秒台の俊雄を揃へたスプリント陣と、南米に使用した藤枝及小西、木下のデイスタンス陣と、兩障礙及ジャンプに縦横に奮闘した福田、戸上、近藤、富谷に、槍に日本記録を保持する長尾、全種目に活躍した當時の名主將城戸の諸君等完璧の陣容を誇りたるに、だが今更過去の華かなりし時代を追想した處で據ない事である、唯此光輝燦然たる歴史を汚さざらん事を現選手諸君に冀ふのみである。

關西インターカレッジも目睫の間に迫つたが諸君は果して關學から覇權を奪ひ、京大を降して十度關西の

王座に君臨するの自信ありや、私見によれば此は決して不可能にあらず、唯目指は關學に非ずして京大にありと斷言し得る、關學は榎本、戸田以下相當数の卒業生を出し、連覇覺東無い。然るに京大は吉原、山下を送り出したと言へ、本年入學した新人は投擲の野村以下相當有力選手を迎えてある。關大は僅に岩尾前主將を送り出したのみにて其後變動も少く青木以下のスプリント陣、門田主將以下の中長距離陣、元氣恢復を傳へらるゝ大室以下の跳躍陣、投擲に縦横に拳腕を奮ふ大橋、林の兩豪、障礙の鈴木、之加新人長田以下十餘名の参加は昨年の不振を一舉に挽回することも期待してある。本シーズン初の第一戦大商大戦に於ける記録は門田、大室以下に本年こそ其の感が深い。

選手諸君は唯單に關西大會に於て優勝することばかりでなく、秋の全日本大會に昨年以上の進出を期待したい。現在の陣容及記録からして遂に覇權掌握は無理ならんも、文、早、日、に次いで是非第四位に躍進を期待するも共に其不可能にあらざるを極言する、青木以下の短距離群が百に十一秒を切り二百に二十二秒台で走り、主將門田が四百に五十一秒、八百に二分を割り、中障礙に鈴木が五十六秒台で越え、大室が高障礙に十五秒五、三段跳に十五米二〇、走幅跳に七米三〇、走高跳に一米八五を跳び、大橋、林がハンマー、砲丸に夫々四十五米、十二米五〇の線を越せば強も優勝も不可能ではない。諸君の素質からして以上の記録は出し得ないことはない。諸君は自己の記録と大島以下各先輩の記録を對照して努力し反省しなければならぬ。本年は皇紀二千六百年の意義深き年であり、尚先輩川手輝典君が富士の裾野に軍務の爲斃れた市合戦である彼の冥福を禱る爲にも前記の要誓に應へて貰ら度いのは恐らく私一人ではあるまい。

校友各位に御依頼

昭和十五年度校友會費御納入の時期が参りました。御都合により集金郵便にても差上げますが、經費節約の爲、振替用紙を本誌末尾に挿入致しますからお手數乍ら御拂込み下さい。

尚會員名簿の正確を期する爲、勤務先、住所等御移動の節は御一報下さい。御通信には出身年度部科別の御記載をお願いいたします。

昭和十五年五月

關西大學校友會

振替大阪五五五九四番

校友會費拂込者氏名(其の二)

昭和十五年度會費(金委圖)

西田 通男 野口 省吾 中尾 仁 島田 隆男
 亦木 哲英 皆木 銀夫 森田 秀和 渡邊 利就
 松尾 實 梅村 勉 山崎 訓司 徳永 禎信
 中島 正克 澤田養之助 田村 文男 武田 建一
 井上 義次 寺西 嘉幸 井上 信 大田 徳英
 是川 繁 島中和一郎 藤井 研一 西田 竹松
 安井 慶一 庄司 直大 嶋田作二郎 狐塚 正雄
 松本 義貞 田中 晃 赤座 兵衛 野村 光二
 生水 邦夫 太田 正春 道木 茂信 井邊 勝治
 天野 正 北田 法璋 武内要次郎 越前屋清輔

奥野 邦輔 奥田 信夫 池田吉太郎 深本 敏雄
 武田藏之助 北原 逸美 青山 正信 大田 直一
 北野 仁作 角谷 通夫 櫻木 幸生 棚池 信一
 高見 忠能 柴田 光雄 松實 君男 金 萬基
 若松四四雄 宮本 英男 中垣 一雄 藤本 喜彦
 紙谷 久善 楠部 保 淺岡 太郎 高橋 博
 尾花 喬男 大山 栗夫 吉岡 幸造 米田 三夫
 井内 喜美 泉 隆三 奥田 正男 大前 金二
 岡田 八郎 象 實 齋藤 達郎 稻岡 定雄
 森川 直毅 東端 龜市 片山 壽吉 藤田 利秋
 野瀬 一 永野 義虎 平井 光一 福島 敏雄
 樽井 豊 西木 五郎 阪口 正三 小阪 正泰
 宮下 忠吉 寺村 春雄 正井 清春 萩原 光三
 増田 元男 近藤 正夫 矢内原 一 片岡 珪
 佐藤 豊 和氣 正之 田邊 榮三 眞銅 長治
 下原 良平 谷川 國一 植芝 達夫 八島 弘
 上田 亮 中島 輝弘 森田 豊 吉田 英二
 永松 均 市原善次郎 龜川 徳信 寺島平太郎
 森 誠弘 市岡 正五 岩本 正晴 加藤 壽
 田中 忠雄 岡本 正雄 吉田 薫夫 津田 安道
 金 益 華 中山 福一 吉住 章 岸本 丈夫
 辻 勝一郎 大平 敏雄 懸 一裕 川島 忠治
 國平 利一 高島 一男 高田 康雄 秋山 充弘
 植田 貫之 和田元太郎 奥田 悦二 宇喜多永康
 小川 弘法 青木 壽 中岡 亘 脇本 光男
 萬谷 葆 高橋 輝人 村田權太郎 阿橋 正巳
 田代 忠男 大野 清 置鹽 正三 山本 稔
 清弘 正人 木村 富士 加茂野虎雄 河野省三郎
 西山 友市 大澤憲之進 古谷 邦豊 松岡 一郎

藤田 哲 稻毛 元一 井上三四士 池田 幸雄
 北星善四郎 古賀 孝一 谷口 剛 中谷 千尋
 大槻 信保 小田 實然 渡邊 正策 山本 隆光
 澤原 清 川上 道雄 谷 良二 淺野 清嗣
 櫛田 武雄 綾部 幸夫 畑山 朗 荒井 安彦
 岡崎 繁 木戸準一郎 吉田 眞 氏林 清
 大村 民明 谷山 清喜 辻井 寛 三木 恒男
 笠原 國男 木村由之助 井上 三男 丸山喜三造
 山田政次郎 三船 晶 間戸揚秋三郎 小林 茂
 寺部 清毅 遠藤 富雄 桐山 一雄 安本 丈夫
 徳毛 俊雄 岡 廣一 北岡 安雄 網谷 一衛
 中村 治雄 藤本 浩一 穂積 芳男 村上 芳雄
 竹馬 鬮男 前田 正行 橋高 勇夫 永田規矩夫
 菅野 誠孝 西垣 義太郎 山根 大治 藤本理八郎
 辻 博雅 小渡 信一 筒井 國義 廣瀬 正夫
 西上 義男 宮崎 義男 橋本 照 祐保 吉次
 西村 孝男 蔡龍 策 池田富次郎 藤井 武

大正十一年六月十五日創刊
 昭和十五年五月十日印刷
 昭和十五年五月十五日發行

大正市東淀川區長柄中道二丁目十二番地
 關西大學學報局

編輯人 神屋敷 民藏
 發行所 關西大學學報局
 印刷所 谷口印刷所

天六學舎 大阪市東淀川區長柄中道
 本部電話 三〇三九
 支店電話 堀川 二七六〇
 攝津 吹田 二六〇〇
 五藤 要

千里山學舎 大阪市外千里山
 本部電話 吹田 四一六三

慶應大學教授
經濟學博士
金原賢之助著

爲替理論概説

四六判上製二九七頁 定價 一・二〇

爲替相場は如何にして決定されるか、と云ふ問題は古くして又新しい問題であり未だにその解決を見ないのが現状である。それは爲替相場決定要因に對する見解が實際的な側面と理論的な側面とが相互に關聯なしに取扱はれて來たことに起因する。本書はかく理論的に貧困化せる爲替理論の發展の爲に從來の理論的概要を批判的な見地から歴史的に叙述したもので、初學者研究者の何れを問はず現下の爲替問題に對し、その解決を見出さんとする人々は必ず一讀を要する。

横濱高商教授 森田優三著

物價變動の測定

四六判上製二〇六頁 定價 一・二〇

物價問題並びに價格統制に關する諸問題の根本的解決を迫られてゐる今日の如き未曾有の價格變動期に直面せる時、物價は如何に變動するか、かゝる變動は如何に測定されるか、且測定手段たる物價指數は如何なる理論的價値をもつか等の問題が反省されざるを得ない。本書は從來の物價指數理論に對して全面的な再検討の必要を論證すると共に最近の歐米に於ける諸學説を紹介しつゝ、新しき經濟理論に基づく物價指數理論を展開せるものである。敢て一讀を薦む。

大阪商大助教授 五島 茂著
増訂改版

學術論文の旂

四六判上製二八二頁 定價 二・〇〇

學術論文の書方にはコツがある。殊に經濟・法律・その他社會科學關係のものはそうだ。誰でもその難しさを痛感し、そのコツを知りたがつてゐる。が、教授も先輩もあえて自分の工房の秘密を洩すことをしない。本書はそのコツを具體的な事例を用ひて懇切に解明してある。眞理を探索する學生諸君の座右には是非備へられんことをお薦めする。

京都帝大教授 蜷川虎三著
經濟學博士

漁村對策研究

菊判並製二三八頁 定價 一・七〇

東亞新秩序建設をするにしても先づ日本經濟の再編成こそが緊要な問題として提起され解決せられねばならぬ今日、農山漁村に對する認識は殊更重要性をもちに至つた。然るに漁村に對する認識及政策の研究は餘りにも等閑視されてゐる現状であり、食糧問題、人口問題の解決の爲にも、且又日本經濟構成に於ける日本水産業の地位を理解すると共にその將來に於ける展望を有つことは國民としての義務であらう。著者はこの方面の權威であり必讀すべき書であると信ずる。